一橋大学大学院言語社会研究科

L'École doctorale "Langues et Sociétés" - Université Hitotsubashi

国際シンポジウム Colloque international

生と性、自伝、あるいは、フィクション

La vie et la sexualité, l'autobiographie, ou la fiction

大浦康介 **Yasusuke OURA**（京都大学）

『わが秘密の生涯』（*My Secret Life*）を読む

Lire Ma Vie Secrète

ジル・フィリップ **Gilles PHILIPPE**（パリ第 3 大学）

ジャン=ポール・サルトル　生とフィクション

Jean-Paul Sartre : la fiction et la vie

コメンテーター Commentateur

澤田直 **Nao SAWADA**（立教大学）

日時　2012年7月21日（土）13時より　Le 21 jouillet 2012 à partir de 13 h

場所　一橋大学 東キャンパス 国際研究館 4F 大教室（中央線「国立」下車）
Université Hitotsubashi　Campus-Est　LS/CGE Building (Kokusai Kenkyu Kan)
4e étage　La grande salle (Dai-Kyoushitsu)　(Kunitachi, La Ligne Chuo, JR)

連絡先　森本淳生（一橋大学）　atsuo.morimoto@r.hit-u.ac.jp

主催　科学研究費補助金・基盤研究(B)「生表象の動態構造――自伝、オート・フィクション、ライフ・ヒストリー」

使用言語　フランス語／日本語（フランス語講演には日本語通訳がつきます。La conférence de M. Gilles Philippe sera donnée en français avec la traduction japonaise.）

趣旨説明　13:00-13:10

大浦康介　『わが秘密の生涯』（*My Secret Life*）を読む　13:10-14:30
【概要】性的生涯の回想は、生表象の重要な一部をなすジャンルである。「性」が「生」にとって重要であるからだけではない。Vita sexualis の物語こそは、生表象につきものの〈暴露〉と〈隠蔽〉のドラマツルギーがもっとも尖鋭な形でみられる言説空間だからでもある。本発表では英国ヴィクトリア朝の『わが秘密の生涯』（作者不詳〉を取り上げ、性と自伝的エクリチュールとヴィクトリア時代という三者の交差点で生表象を考えてみたい。

質疑応答　14:30-14:50

休憩　14:50-15:10

ジル・フィリップ　ジャン=ポール・サルトル　生とフィクション　15:10-17:00
【概要】伝記、自伝、私的な書類は通常、事実を述べるテクストとして分類され、そこではフィクションは用いられないと考えられている。しかし、ジャン=ポール・サルトルの作品の場合を考えると、ことはより複雑である。このフランスの哲学者にとって、生は「真実に基づいた小説」の枠組みにおいてのみ書くことができる。つまり、フィクションだけが、個的主体の絶対的に個人的な体験の背後にある普遍的なものを表すことを可能にする。そのため、サルトルの哲学的散文（例えば『存在と無』）だけでなく、実存的伝記の大作（例えば『家の馬鹿息子』）においても、さらには彼の最も個人的な著述においてさえ、フィクションの利用が求められることになるのである。講演では、とりわけ『言葉』をはじめとするサルトルの主要な自伝的テクストについて、また、謎めいた未刊の草稿のひとつである『女王アルブマルル』について再考し、サルトルはまさにフィクションを用いることによって「生を書くこと」ができたのだという点を示すことにしたい。「生を書く」とは、『言葉』の「ひとりの人間は、あらゆる人間からできている」という有名な表現が的確に表現しているとおり、「個的な普遍」を表すことにほかならない。

コメント、質疑応答　17:00-18:00